

六 学外に羽ばたく体育会

◆名阪戦

名阪戦は、戦前から大阪大学との間で、各運動部が独自に開催していた対抗戦を戦後になって統合した総合的な対抗戦です。名阪戦の理想は、運動部だけの交流ではない全学的レベルでの交流親睦にあります。両校の運動部が交流を深めるために、試合はもとよりレセプションを用意しています。また一九七〇（昭和四五）年の二四回大会では、大学内の各種スポーツ大会で優勝した一般学生チーム同士の対戦という画期的な企画も用意されました。このとき名阪戦ボーリング大会では、学内大会の上位五人が名古屋大学代表として参加しています。お互いに旧帝国大学であり、同程度の規模ですが、名古屋大学体育会はこの名阪戦を多少苦手にしているようです。戦績は表五のようになっています。現在では毎年六月に開催されています。開催にはお互いの大学体育会、学生部が協力しています。体育会は、大会に対する資金援助、会場や宿舍の確保、大会の広報をはじめ、大会運営全般をマネジメントしています。

◆国立七大学総合体育大会

七大戰は、もともと帝国大学の流れを汲む国立七大学（北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）の間で各運動部が独自に開催していた定期戦を取りまとめた大会です。一九六一年頃は、剣道部や柔道部など伝統のある部で定期戦がおこなわれていました。しかし、時期や開催場所は一定せず、一般の関心も薄く消滅しそうな状況にありました。発案者は、一九六一年の阿竹宗彦・北海道大学体育会委員長でした。大会の目的は、クラブごとにかかる運営資金の縮小、総合化による士気向上、同レベル・同条件の大学が集まることによつて、競争意識、ひいては、全体のレベルを高めることにありました。

当初、阿竹さんの案は賛同を得られませんでした。とくに東京大学と京都大学は従来から競技レベルが高く、試合相手も不足しなかつたため、開催に反対の意向を示していました。しかし阿竹さんの熱心な説得によつて、賛同する大学も増えて第一回大会が北海道大学主管で実施されました。

その後大会は、肥大化によつて会場や宿舍の確保が困難になるという問題が発生しています。資金面でも一〇〇万円規模から、一九八〇年代後半には一〇〇〇万円規模と膨大なものとなり課題を残しています。この七大戰の開催は、七大学の持ちまわりで開催されています。

一般に、大会では開催大学が地の利を生かして総合優勝する傾向にあります。が、名古屋大学

体育会の成績は第二八回に総合優勝するまで一度も優勝がありませんでした。名古屋大学以外
はそれまでに総合優勝を経験しており、総合優勝の経験のない唯一の大学でした。表六に示す
ように地元開催となった第二八回大会でついに優勝を果たし、それ以降は上位を維持していま
す。また第三五回に二度目の総合優勝を果たしています。

ところでオリンピックをはじめとしたスポーツイベントでは必ずマスコットが作られます。
七大战でも北海道大学主管の第二二回大会以降、マスコットが作られています。一九九六年度
の『濃緑』には歴代のマスコットが紹介されています。

◆東海国立体育大会

この大会は、一九五二年に名古屋大学が主管して始められました。第六回大会までは東海地
区の私立大学や公立大学も参加していました。その後は六大学（名大、名工大、愛教大、岐阜
大、三重大、静岡大）の持ちまわりになりました。しかし名古屋大学以外の国立大学には体育
会組織がなく、大学学生部職員に多くの支援をうけて開催されているのが現状でした。一九七
五年度からは浜松医科大学、一九八〇年度からは豊橋技術大学も参加しています。